信濃教育会　研究発表会（in 生涯学習センター）

令和６年６月１５日

佐伯胖所長　　開会の挨拶

おはようございます。今日はお忙しい中、また暑くなりそうな中をお集まりいただきましてありがとうございます。今はどんどん暑い時期が 増えてきて酷暑というようなことが東京では言われてきておりますが、長野でもそれに近く、非常に暑いことが 当たり前みたいな時期になってきたようですね。そういった中でお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

では、教育研究所というところがどんなところなのかについて、私なりの考えを少しお話しさせていただきたいと思います。普通、教育の研究所というと、 教員は自分の授業技術、つまり分かりにくいことを上手に分かりやすく教えられるとか、あるいはクラスの運営、クラス一丸となって何かに取り組むといった、そういう教師の腕っていうか、いい授業ができる、 そういうことを身につける、そういうことを学ぶところが研究所で教育を研究する、 教えることを研究するということになるかなと普通思うわけですね。ところがこの研究所に入りますと、そういういい授業はどうすればできるかという話があんまりないんです。というか全然ない。そういう教えようとか、上手く 教えていい授業をしようという意識そのものが全然違うんだっていうふうなことになっちゃうんです。そうして、教師が教えるという意識を一旦捨てて、一人一人の子どもが、 目立たない子どもとか授業から外れて勝手なことをする子どもとか、どっちかっていうと見たくない、 考えたくないような子どもが、一体何を考えて学校に来ているんだろうな、ということに思いを馳せる。それがふり返りなんですね。ふり返るというと、自分の授業技術のどこがいけないかとか、どうすればよかったのかとかをふり返ることだって言ったら、そうじゃない。 見えていなかった子どもを見るというよりも、そういう子どもがどんなふうに生きようとしているのかに 思いを馳せること、それがふり返りということになっちゃうんですね。だから、ふり返るのは自分をふり返ることじゃなくて、子ども自身がどういうふうに学校に来て授業に参加しているかということに思いを馳せる。 それがふり返るっていうことになっちゃうんですね。で、そんなふうに 子ども自身がどのように授業に臨んでいるのか、授業に全然ついてこない子とか、勝手なことをする子を含めて、「あの子は一体その時何を考えてたのかな」っていうことにいろいろ思いを巡らせてみるという、 そんな研修なんですよ。そんな教師が教師としての腕を磨くという話では全然なくなっているところで、戸惑いというか、「なんだったんだここは、こんなはずじゃなかったな」というような思いを持ちながら研修に臨んでいるわけなんですが、そうこうしてるうちに、子どもというのは独自のそれなりの思いでなんとかよく生きようとして、いろんなことを試みて、 なんとか自分の生き方をその子なりに探っているということがなんとなく見えてくる。それはまさに見えてくるということであって、こちらが見ようと思って見えたという話というよりも、あんなふうなことやってるぞっていう、想定外の子どもの姿が見えてく

るんですね。 で、そういうふうに子どもはするんだ、そんなふうに思って学校に来ていたんだ、そんなふうな思いで授業に参加していたのかというものが見えてきた時に、何もこちらが教えようとするということではなくて、子ども自身が独自に学ぼうとしているということ、 そういう独自の学びと、子どもが自分で探っているということが見えてくると共に、子どもの学びを、応援する人になろうというふうになる。子どもの前に出て、こうすりゃいいんだよって言うんじゃなくて、子どものやや後ろから、子どもはどう生きようとしているのかなということを応援する。そういうふうに、教師というのは影の方から、子どもに対する応援する人なんだなっていうふうに思って関わっているうちに、子ども自身は全然考えてもいない学びを自分で作り出して、 そういうふうに自分で作り出した学びの中に没頭していく姿が見えてくるようになる。そうなると、子どもと一緒に学ぶことの喜びや楽しみを子どもと一緒になって楽しむという、そういう教師にだんだん変わっていくんですね。そういうふうに、 子どもに対する考え方が全然違ってくるということが分かると、 研修を受けていく中でだんだん自分自身が変わってくる。つまり、教師というのは、教える人じゃなくて、子どもの学びを影で応援する人、 そういう人になっていくということが見えてきた時に、子どもの表情や子どもの授業に対する営みがなんか生き生きとして見えてくる。子どもが学ぶことを楽しんでいるということが分かってくる。そういうふうに研究所というところで発見する、新しい自分になっていく、そういう経験をするわけですね。

今日の研究発表会、７７期の研究員の皆さんがそういうふうに、研究所に入ってどんでん返しを食らったような思いで、こんなはずじゃなかったということを経験しながら、 なんかこれは本当の教師というか教育っていうこと、別に上手い授業するとか、 良い授業の運営ができるという話とは違って、一人一人の子どもが自分の生き甲斐を見出していくこと、それを一人一人の子どもに寄り添って応援していく、そういう教師もあるんだなということがだんだん分かってくるんですね。

今日は、そういう新しい教育ということへの見直し、教えるということを、 教師が上手に子どもに教えてあげることではなくて、子どもと教師も共に学んでいく、そういう同伴者としての教師ということに変わっていく。 そういうことの成果が本日皆さんの研究の発表の中に見られると思います。皆さんも今日の１日は、なんかいい授業技術が身につくんじゃないかと思ってきたかもしれませんが、 そんなことではなかった。教師ってそういうものなのか。教えるっていうことは、別にいい授業を子どもにしてあげることではなくて、子どもの一生懸命生きようとしていることに、付き合っていくんですね。子どもが自分で学んでいく姿を応援していく、そういうのが教師なんだなっていうことに自身の頭が切り替わるということが生まれれば、今日の研究会に参加した意味があると思います。ぜひ、 今日の１日をそういうふうに自分の中に新しい変化をもらえることを、楽しんでいただきたいと思います。どうぞ今日はよろしくお願いします。